

不亡草が

母上よあれから五十九年目です不亡草が今朝咲きました

花

秋立つとウソだね暑かったんだよ五十九年前からの空

海月

初秋の砂浜白く歩み行くワタシハドチラガワニイルノカ

ぽぽな

夕風の沖遙かなる日輪のまかがやく中へ鳥の影行く

海斗

こゆるぎて相模の海の夏夕焼マストの鳥の瞳つぶらか

真奈

小余綾こゆあきの磯を東に十里なる腰越こしあきの地に小動岬こどうさきが

蘇生

少年の岬に浮いた白ら雲がいまも耀ふ人の哀しも

しゅう

遙かなる浦上につづく今朝の空わが黙ふかく頭を垂れてゆく

花

ふるさとに似て懐かしき港町その長崎のその日の朝を

蘇生

端居して読経聴きをり雲ばかり幼き朋のけふの朝なり

海月

視覚障害者からの音読依頼朝から始めるさだまさし著「解夏」

雛菊

知らぬ間に唇零るペリカンは秋晴れよりもうつくしいかな

ぽぽな

わが胸に深き井戸ある美しき水滴たすべく歓びあれよ

花

遠き日の清らかなりし風と水仄かに想う懐かしき恋

白馬

まつすぐに空をめさせる蚕豆わかみの稚実わかみのごとき恋なりしかな

かわせみ

ヒロシマ・モナムール 私はすべてを見たわ君はなにも見てはいない

海月

たまゆらの情事に燃えし残像よ死の影さえぬヒロシマ思えば

花

何もかも朝の色に染まるとき夢のかけらの風にキラキラ

真奈

いつしらに法師蟬鳴きゆく夏の朝まつしろな皿をならべる 花

けふもまた絶えることなき蟬の声けだし盛りの主は代はらむ 蘇生

さいならと猫にあいさつ残り蟬 敗戦日まだ虫は鳴かない 海月

体ごと壁に突つ込む残り蟬お母さーんと叫んで散ったか特攻兵士 雛菊

恋人の裸体画遣し散ゆきぬ画学生はも哀しかりけり しゅう

つ・・・と寄りて「告別」をみし「涅槃」みし香月泰男の没後三十年 花

囚われて黒きフードに縄打たれアブグレイブに人は居りしか 真奈

戦いは人の心を荒ますか心中巢食ふ虫の出ずるか 海斗

帰る家もうないのにと山崎八コ ふつつの雨が降っている今日 海月

しみじみと「米軍キャンプ」を聴きながら辛ラーメンをすすっている 花

還暦にあとひと年の終戦日インターネットで玉音を聴く 蘇生

「自らの馬車を星に繋げ」とて桜かざして神兵たちは 真奈

大の字に刈り込まれたる如意ヶ岳火入れ支度の人影見えて 蘇生

空こがす遠き炎を見てつくと野性の風の吹き出だすかな しゅう

松明が点り始めた山稜に何やら黒く浮かぶ大文字 蘇生

サヌカイトもゆらに韻き山稜の舟形の炎は風を孕みつ^ほ かわせみ

夏葱を厨にきざみ送り火をみしことなければ不意にさぶしく 花

盆の唄とほくちかくに舟は出づちひさき川の此彼のこと 海月

舟歌の間奏曲の流れ来るふとまどろみの小夜の涼風 真奈

腹を割ってなにを語ればよいのやら典雅なる樂聴くふりをして 花

喫茶店の2時間会話を推奨する斎藤孝に異議のありけり

しゅう

天才も人たるゆえのアテネ発こもこも悲喜に異議なかりけり

蘇生

嘗てわが喝采を浴びしことなきにオリーブの冠欲しくはないか

花

金メダルと決まりし刹那なにもかも忘れてしまふひとの顔見し

白馬

金銀のメダル話に踊る島パソコンやりにここまできたよ

ぼぼな

異国から桃李に詠うぼぼなさん久しぶりなる故郷はいかが

蘇生

飛行機はとても怖くて乗れません夕焼の里はやさしいですか

海月

ねぶた囃子遠くに去りてふる里は黄色の女郎花山染める頃

雛菊

秋風のそ知らぬ顔で脇抜けてゆくこの頃の淋しくもあり

しゅう

父母を看取りし後のふるさとの友の孤食はさみしくあらむに

花

朝・昼・夕 食と食との間合いでは我のむさぼる自由には足らずしゅう

死なむほど狂はむほどに愛ほしき君に捧げむ我が恋心

冬扇

「冬ソナ」にはまりし友の熱射病「ヨン様ヨン様」とうるさくてかなわぬ雛菊

「そら」といふ友の居りけり昨日まで雨に紛れてどこまでいった海月

ヨンというモンゴロイドのやさ男芝生は隣のやまとなでしこ 蘇生

端的に、もし言うならば親友よ 心病むとは天の采配

花

発狂は神の救いに外ならず癪療養所君(東條耿一)付添夫

しゅう

カッターナイフに友を刺ししはしらぬひのつくしをとめご齡

よはひ

死などなにほどのこともなしとう大き手に攫われゆきし天の高処に 花

生き急ぐ二十三歳の死をほつと寮友たちは葬りまいらす

しゅう

蝉消えてしづかな晩は黒七味はらはらかけて粥をいただく 海月

扁炉という鍋を煮るわたくしの真の飢えを君知るやゆめ 花

わが夫の淋しさは知らじひまわりは振り払いてもアイデンティティーしゅう

朱夏過ぎて白秋に入りて想うこといかなる道にも辻はありけり 雛菊

扶桑社版「教科書」採択わが母校曲り角にたつ日本の子ども 真奈

ものを知るなにほどのことあらん秋^{とき}見ることを語れ痛みなにいる海月

秋の夜の静寂に座し夭折の人の遺稿をつつしみて読む 花

わが生を怯懦の子なりとおん神に許しをこうは受け容れがたき

(東條の遺稿、訪問者) しゅう

我よりもなほ吾(あ)に近きものなれば汝^なは吾が主なり木槿花散る 瑞恵

夕蝸のこえ澄むは神のこえ木道は天に架けたる階^{きざし}のよう 花

梢の間秘めたるごとく高き空神しろしめす秋の夕暮れ 白馬

初秋の夕べにシャワーを浴びをりてぴりりと熱き風呂が恋しき 蘇生

桔梗野湯木の札竹かご大風呂敷番台のおばさんちりちりパーマ 雛菊

政治家になつとらんとの罵声浴びせ女湯からの子供呼ぶ声 海斗

シーサーは大き目を剥きヤマトンチューよまたわれわれを見殺しにするとか！

真奈

江ノ島に寄す高波の本源は南西諸島沖の台風 蘇生

西表あさがお露をふふみつつこの世に咲^ひ天上の青 かわせみ

此処より先へ生きて何視む葬の明日咲く花の数をかぞえて 花

満月のこの満月の皓々と猫と遊ばむ天地有情

海月

前肢を揃えてしばらく坐りおり風吹けば風のなかの野良猫

花

あきかぜにはこばれてくるをさなこのゆらゆらりんぶらんこのうた 雛菊

しのびやかに世は秋の国正座して東條耿一の詩を朗読す

花

語らひは刹那刹那に出で消えてねこじやらしただ風に輝く

ぼぼな

耿一は縄文杉の哄笑のごと詠み尽くせしかかの詩かの生 命日に寄せて・真奈

チェシャー猫の笑いのやうな月うかび風は耿々花野をわたる

かわせみ

花野果て点々と黒の粒あれはものの元は人間

海月

新しき翼に替えて発ちゆかな天に連なる花野があらば

花

暗がりに花野は白く沈みいて明けて華やぐ萬色の原

蘇生

獣らに踏み荒らされし花野にはなぜ？なぜ？なぜ？と童の言霊

雛菊

嘆くとも祈るともなく葉ももたず全生園に曼珠沙華咲く

花

曼珠沙華空に吸われし少女らの声の湧ききし百合舎廃屋

しゅう

彼岸花咲ける間(あはひ)の道をゆく美智子皇后陛下詠いし

寂

御歌碑も今は昔となりけり遺跡にひそと黒曼珠沙華

瑞

薬袋に夫の遺筆の掠れつつ瓶にさしたる白曼珠沙華

花

此岸に葉見づ花見づ黒白と彼岸は如何望郷臺の児

海月

今昔や望郷臺に近隣の子らが遊びのマウンテンバイク

しゅう

望郷の思ひ凝りし曼珠沙華その首なべて高空を指し

かわせみ

猫が死ぬこの曇天の道端でとくりとくりと息いま絶えた

海月

秋雨のふるゆうぐれの街上の惨劇としてわれは忘れぬ

花

九月十一日島は青空と雲を湛へて祈り続ける

ほぼな

いくさ熄まず地球の裏に歎き満ちインティファダの砂の軋みが真奈

壁こわれまた壁つくるシジフォスのどんづまりです花野あるけど海月

お母さまは淋しいのではないかしらヘルパーのひと言わかつてはいるけれど

雛菊

桃李和歌連作百首歌集

第五九〇一首より六〇〇〇首迄

平成一六年八月七日より平成一六年九月十二日